

WISC 知能診断検査の結果

神田寺幼稚園 小田島明子

私共の園では、毎年春秋二回に亘って、年令別にいろいろな個別並に団体テストを行い、指導上の貴重な参考としてきましたが、たまたまWISCの標準化に当って、園児約三十名を被検者とする機会を得ました。その時、今まで施行した知能テストに比べて、WISCが診断性に優れている事を痛感したので、標準化の完成をまつて、五才児七十八名(男四十九名、女二十九名)に対してこれを施行したのです。それで、その結果を通してWISCの特徴を述べ、私共の診断及処置にふれてみたいと思います。

申すまでもなく、WISCの特徴は、ウェックスラー博士の知能観から生れたものであって、I・Q算出方法、採点の方法、制限時間式と無制限時間式テストの併用など細かくあげられますが、実際に私共がテストをやり、診断を行う上に最も大切なのはWISCが言語性検査及び動作性検査各五種ずつ(代替問題各一種)より構成せられ、全検査のI・Qが算出出来ると同時に言語性検査のI・Q並に動作性検査のI・Qがそれぞれ算出されることであります。

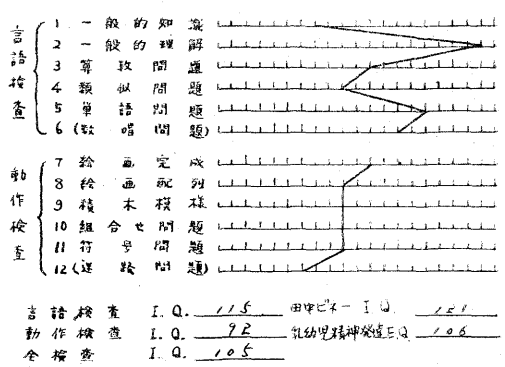
幼児の精神活動の観察は、言語による発表のみに頼るのは不十分

であつて、勿論、言語活動以外の動作性活動によって表現されるものをも見極めなければなりません。しかも言語の発表能力の優れているものが、必ずしも動作性活動にもすぐれているとは限らず、しばしば、それは対照的に表われています。現在、最も広く行われている。田中又は鈴木ビネー式知能検査は言語性検査の、愛育会の乳幼児精神発達検査は動作性検査の代表的なものであって、その結果を比較してみると更に明瞭になります。(第一表参照)ですから、幼児の精神活動なり発達なりを、客観的に全体的に、捉えるのには言語性のもので動作性のもを同じ重きで含んでいるテストが望ましく、WISCはそれを満してくれるわけなのです。

第二に、更に重要な算色として、知能を構成する要因を挙げ、その夫々の尺度を作り、これをプロフィールに描いて、知能構造の特殊性を診断出来る様になっていることがあげられます。即ち、前述した言語性検査五種及び動作性検査五種の検査項目が、各々知能の構成要因となっているわけです。それで、テストの結果が、ただ単にI・Qによって段階的に優劣を処理されるのみでなく、各児童の

プロフィール

表 643+Hや児



理解の諸問題からは、経験の範囲や社交的態度などがおしはかられ、符号問題からは、集中精力が推定出来るという様に、単なる知能構造のみでなく、容易に、性格的な特性をも推測出来るのであります。私共が日常保育をしていて感じる児童達の性格が、WIS Cの結果によって科学的に裏付けられたために、それに対する指導を自信を持って進めてゆくことが出来たのです。

第一表は前述の如く、他のテストによっても言語的特性を持つ児童ですが、プロフィールを描くと、一般的理解、単語問題に特に優れ、これらの問題は質的な採点を行うところから、質的によい答を

知能構造が、その要因の段階と共に表わされ、しかも図示されるので、一目でその特徴をつかみ得ます。例えば、同じ言語性のもので、知識の範囲は広くて常識に富むが、論理的な思考に欠ける。その児童の知的な特性が表わされて来るのです。同時に又、一般的

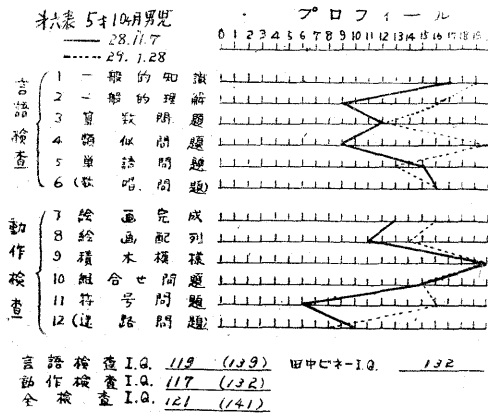
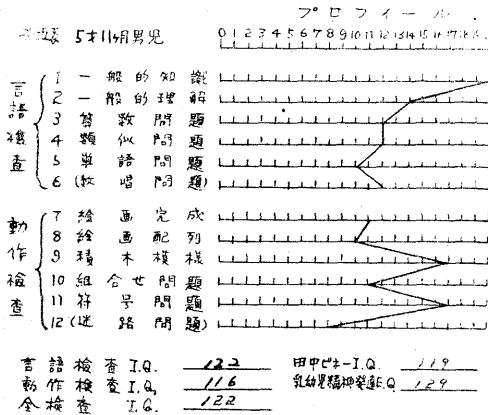
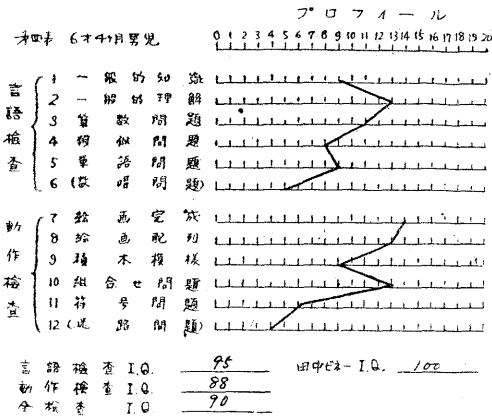
しているといえ、思考力、判断力を持っているが、行動力には欠けると診断されます。同時に、一般の社会生活になれてしていると推測します。

各要因間の段階に凸凹がはげしいには、本当に児童の知能的特質である場合、しつげが偏っていたり一定でなかった場合、バランスを失った性格からくる場合、と三つの原因があり、特に第三の場合には、よほど気をつけていないと事故を起すことが多いものです。それで、診断には慎重に原因を探る事が必要です。

この様に、個々の児童の持つ特徴が画かれ、それは千差万別な形となるわけですが、同じ傾向を持った形を示すものも少くありません。特に、精神薄弱、性格異常、神経症、大脳器質的障害などの鑑別には非常に役立つのであります。私共の園では、一番目立ったのが第四表の様な型で、七十八名中十一名十四%を示したものでした。これは、数唱問題及び迷路問題が他の問題に比してぐっと発達を下っており、集中力が少く感情の不安定な状態を現わしています。実際にこれらの児童をみると、落着きがなく、粗暴な振舞をする男児のグループは皆含まれ、他に、病身であったり無口なため、園生活にとけ込めないといった一年保育児が加わっているのではありません。そこで、それぞれの児童の持っている集中力の少ない原因を考え、それを除く方向に保育を持ってゆかなければなりません。後者の場合は原因もはっきりしておりませんが、前者の男児のグループの感情の不安定さは、園所在地及び家庭の環境、即ち最も交通の激しい、遊び場のない地区の商家に育つた事、及び粗暴な振舞故の叱責に原因していると思われ、高率を示した事と共に私共にとつて大き

な問題となっており、数唱問題の低い時には聴力に欠点のある事もあります。次のプロフィール(第五表)で特に目につくのは、一般的知識で

示した時には、教育の方法を反省して見る必要があると思います。第六表がその一例で、実線は最初施行した時のもので、このプロフィールは参考として父兄に渡しました。赤線は約三ヶ月経過したの

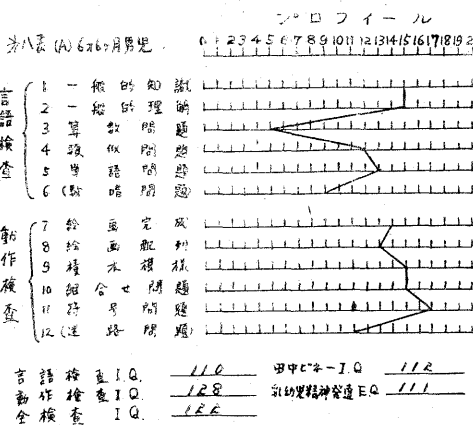


この年令としての最高段階を示しています。この児童の場合には、お祖母様のよい話相手として育ったことに主な原因があると考えられるので、さして問題になりませんが、通常、特殊な小学校の受験準備教育をやたらに父兄が行っていますと、一般的知識や算数問題が高く、他は水準よりぐっと下るといふ形になり勝ちです。一般的理解、類似問題などによる思考力、判断力が低い得点でこの様な形を

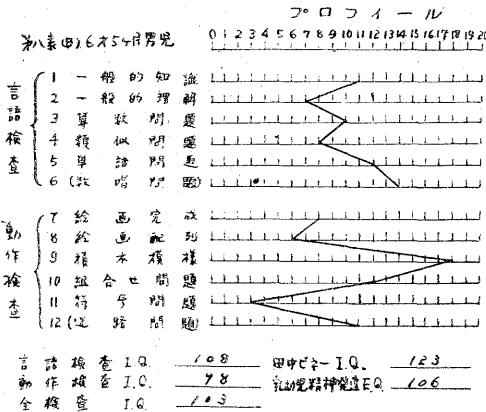
ち再施行した時のものです。最初悪かった一般的理解、類似問題が二度目の時にはずっと上り、算数、単語問題が最初より下っているのは、父兄の力の入れ方や児童の受け入れ方が推量されて興味深いものがあります。児童が自分で獲得、消化してゆく能力でなければ身につけてゆかぬものだと感じ、保育の在り方を考えさせられたのです。これらの児童達は、皆一人息子或は長男か末子で、両親か

ら殊更大切にされて育つた者ばかり、前者は四名で、何処かチョコチョコした所があり、おしゃべりが相当にはげしく成人的な云い廻しをするといった者、後者は五名で、無口でおっとりしている様で、線の細い所があり多分に神経質であるという者で、それぞれに共通した性格を持つている者は、同様なプロフィールが画かれることが証明されたのでした。

勿論この結果のみを信ずるのは間違いであつて、最後にもう一つの例をあげてみたいと思います。(第八表) A は二年保育年長児、



B は三年保育より通園しているものです。A は入園した一ヶ年間、



お分り頂けたら幸だと思えます。

です。私共はWISCが従来のテストより診断性に於てすぐれているといつても、児童の人格を知る上に完全なものであると思いませんし、又、結果を軽々しく判断はしてないつもりです。ただ、WISCの特徴が保育上どの様に利用しているかという事が

田中ビネー、乳幼児精神発達検査に於て同様のI・Qを示しました。体格もよく腕力をふるって勢力を振げてゆくが、仲々小心で怒られたり病院にゆくのは大嫌いで泣き出す、といった性質の子です。そのため園に対する適応がおそかったのか、やっと二年目に入つてから、明るく落着いて来、作業なども熱心になりました。その結果がWISCに表われていると思います。反対にBは、物分りのよいおだやかな子でしたが、母親がほぼ二年間療養生活のため離れていました。最初は生活の変化はみられませんでした、次第に寝坊を

しては園を休む日があるといった状態になりました。その時に行つたWISCはI・Qも低くよい結果とはいえません。負担になってはいけなるとテストを中止し、母親が戻つて数日のうち積木模機と組合せ問題をやりました。プロフィールで上位を示したのがそれです。家庭の事情ばかりがその理由とは思えません、児童の情緒の安定度がテストに与える影響がかなり大きいことを示しています。